

猿人のヒーローアカデミア

新参者基本読み専

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

猪突猛進でケンカつ早い少年猿飛直人それを抑えたり助長したりと仲が良い取陰切奈

そんな彼らが色々な人と出会いヒーローを目指す
だがそんな彼猿飛の個性にはある秘密が!?

作者の思いつきですので箸休め程度になれば幸いです

入試
1

目

次

1

入試1

「（）かあ

俺猿飛直人さるとびなおとがいるのは雄英高校の校門前だ。何故いるかというと

俺は今日、ここを受験するからだ。

雄英高校、倍率は何と300倍を越える超有名高校だ。てか倍率が300越えるとか就職とかの倍率がスゲー低く思えてしまうのは俺だけか？

「ま、やるだけやるか。ここ落ちてももうひとつ受けたい所あるしな」

「いや、そこは頑張つて合格するぞとか言いなよ」

俺のボヤキにツッコミを入れる声がしたのでそつちを見ると同じ中学で同じクラスの取陰切奈とかけせつながいた。

「あ？なんでお前ここにいるんだよ？お前受験終わつただろ？」

「別に良いじゃない。私の事より自分の心配したら？」

取陰は推薦をもらつて俺よりも早く受験が終わつてる。何処の高校に行くのかは聞いても教えてくれなかつたが。

「まあ俺はやるだけやるだけだからな。それで駄目だつたら駄目で次考えるだけだしな」

「はあ…ポジティブなのか何も考えてないのか」

俺の言葉に呆れてる様な感じでタメ息を吐きながら答えた。何も考えないは酷くね？

「ま、とにかく行つてくる」

「いてら。終わつたら連絡してよね」

「何でだよ」

そんなやり取りをして俺は雄英高校の受験会場へ向かつた。



筆記試験が終わり、次の実技試験の説明が終わつて俺はその試験会場にいる。筆記試験は解答がずれてないとか見直しもしたしちゃんと名前も書いてるかも確認したから大丈夫だろ。

実技試験は1～3ポイントの仮想敵^{ヴィラン}ロボットを倒せば良いとの事だ。そして一体だけお邪魔のやつがいるらしい。これはメガネの眞面目くんが説明を聞いて質問したから得た情報だ。（緑色の髪のやつを注意してたけど）

「しつかし、本当人多いなおい」

周りを見ても人だらけ。個性の影響なのかガタイが良いやつとか変わった姿をしたやつとか多種多様だ。

「さて、試験はいつ始まるのやら…」

そう軽く体を動かして準備していると、

「ハイ！スタート!!」

「あ？」

さつき実技試験の説明をしていたプレゼント・マイクがデケエ声で叫んだ。てか、スタートったか？

「HEYHEY！どうしたんだ!? もう開始の合図は出したぜ～!! もう始まつてんぞ!! 実戦じや合図と何もねえぜえ～!!」

「チツ、分かってんよ!!」

お袋や親父が言つてたが実際だとやつぱり反応が遅れるな！その声を聞いて他の受験生が走つて行くが、

「悪いな、先に行かせて貰うぜ！」

俺はその受験生達の上を飛んでそいつらよりも先に進んだ。

「おい!? あいつ飛んでやがるぞ！」

「そういう個性かよ!?」

他の受験生がそう言うが実際は全然違うんだがな。これはお袋と親父がよく使う気つてやつを使って飛ぶ技術だ。名前あるのか聞いたが無いって堂々と答えられたからそれからは聞かなかつたが：（ちなみに親父はお袋から教えて貰つて出来るようになつたらしい）

そして俺の個性は猿人。といつてもこの個性は医者が付けた個性名だ。親父の個性が大猿。異形型の個性なんだが普段は普通の人なんだがその状態でもその大猿のパワーを出せるし任意で大猿になれる。（ちなみに猿の尻尾がある）

お袋の個性はアマゾネス。興奮すればするほどパワーが上がる。

といつても興奮は戦いとかの興奮じやないとパワーは上がらないらしい。それと戦えば戦うほどさらに強くなるという事だ。

そして俺は親父と同じ様にパワーは出せるんだけど任意で大猿にはなれない。そしてお袋と同じ様に戦えば戦うほど強くなるらしい。（これは研究所でバーチャルの敵と連戦で戦つて分かつた事だ。そして俺にも黒い猿の尻尾があつた）

他の個性とは違うみたいなので猿人という個性名になつた。親父とお袋の個性の中間？か上位互換？と頭を抱えてたのをよく覚えてる。そして異形型の個性として診断書が書かれていた。

そして暫く飛んでもると仮想敵のロボットが数体表れた。

「ブツコロ」「うるせえガラクタが！」

全部を言わせるつもりも無かつたので即座に潰した。

「つしや！次だ次！」

目の前に表れたロボット全部を潰して更にロボットを探しに進んだ。